

# 京鹿子

京都府立総合資料館  
京鹿子

2月号

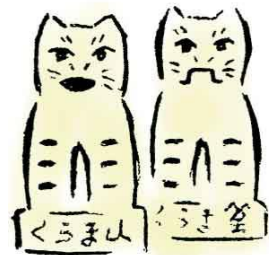
# 成人の日 丸山佳子

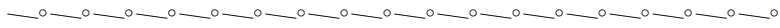
洗ひ来し手をなほ浄めむ初詣

凧あげる紅い橋から村ハッピー

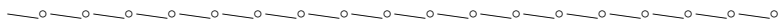
三日早や思ひもよらぬ大封筒

笑顔こそ人通力よ成人の日





初みくじ人のお声が多すぎる  
たとへばの話に新年会無から有  
語尾はねて裸並木にさようなら  
るいるいの岩を集めて眠る山  
わたくしに宮司様より風邪引くな  
大葉ぼたんお賞め申して返事なし

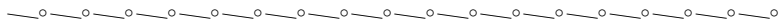


豊 田 都 峰

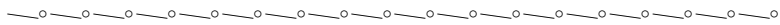
渥 響 集 その六

紅葉散るうしろすがたを恋ひをれば  
墓ひとつ紅葉黄葉に装はれ  
秋雲にのせ片恋の果てとせむ  
粧へる山のなだれのままの寺  
黄葉散る行啓路もまた山越ゆる  
大野原みゆきより峰もみぢ濃し





紅葉洩る日のつくろへる破築地  
青ければ雑木もみぢの空に舞ふ  
晴れの日に散ると決めゐし木の葉かな  
うらがるる径ふりかへることもなし  
つくろはぬ思ひのままの隙間風  
うづくまるふもとの村やもがり笛  
風の夜にあんかう鍋屋橋たもと  
落葉渦前後に生まれつぐ家路



## 秀華採集

秋そこに己が影にもつまづきて

坂本敏子

身体的なことより心理的な原因とみたい。「己が影」とは自分が原因、いわば自分が犯人と認識すればするほどせつなく秋を迎えることになる。「秋そこに」が微妙に響くところがよい。

昼星を預かりをりし花野かな

中島悠美子

大寺の風韻となる黒揚羽

大西優九里

前句の連想は楽しく、「花野」が一段花野らしく思える。後句の大寺という空間設定の中の「風韻」がよい。見たままでなく、それを一段深めた所ですくい上げ、見た形で表現する。

鈴鹿 仁

枯いろ

短日や持ち合はすもの使ひ切る

枯いろの貌して一意秘めてをり

寒椿はなし途切れし風の咎

賀状来る寅・とら・虎の大吼えて

法の字の山を芯とし恵方詣

---

近 詠

---

和田 照海

神の留守

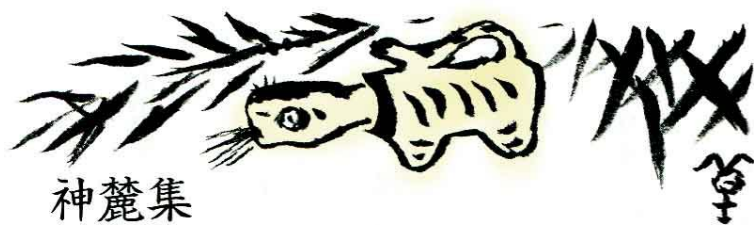
一島はかむなびにして神の留守

むらさきに暮るる田面や冬隣

千羽の棕櫚一羽もこぼさずに

祭鉦いまだそろはぬ序の稽古

勸酒碑の紅葉ばしりの在所かな



神麓集

春太鼓 林 日圓

嗚呼といふ声うすやみに寒鴉  
ニアミスに満席の顔皆凍る  
月ヶ瀬に梅の囁き聞きて佇つ  
啓蟄の穴よりひよいと大統領  
しのび寄る老化蹴とばす春太鼓

十三夜 北村 香朗

一葉に逢いそうな径十三夜  
話の穂はつい代名詞十三夜  
句友より赤福届く十三夜  
ぐい呑は九谷がよしと十三夜  
計らざる長寿となりて後の月

冬半ば 藤岡 紫水

幣振れば白き風立つ神無月  
陽を深く許さぬ木立冬半ば  
一人の餉吹いては崩す煮大根  
小倉山消して時雨の通り過ぎ  
神域に乾ぶ酒樽冬日溜め

高木 智

鈴の音のはなやかならむ初詣  
暁闇の破魔矢鳴らして帰路力む  
玉砂利の音深くなり初詣  
あめなめて小食うらやむ寒雀  
人の出も連休といふ紅葉山

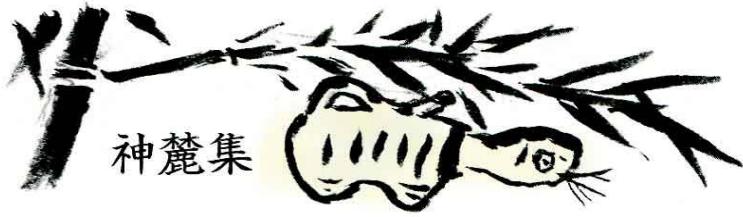
松田 都青

黄落を浴びて自分を見失しなふ  
人間が薄あじとなる秋時雨  
出発の合図はこれだ流れ星  
池に波たたせ動かぬ月に触る  
噛み殺す欠仲のあとの寝待月

瀬寝 瓶史

夜寒の犬走りを忘れ散步型  
いで湯川合流しぐれ虹の橋  
推敲の音を絞れば北風小僧  
知慧の矢の的を射貫けず狐罨  
白菜を刻みつ散骨物がたり





神麓集

木犀の金色の香や門入れば  
 お佛花を替へてもやはり菊の花  
 桐一葉せかされてゐる身のほとり  
 窓辺にて書を播くや初しぐれ  
 白妙の千枚漬をまづ一枚

船越美喜

そぞろ寒

北川孝子

離宮道穂孕みおもき風わたる  
 うす紅葉寝顔のままに逝かれしと  
 叩き牛蒡幾とせ母より継ぎし音  
 いつしかに余生ほのぼの既望の灯  
 己が齡数へおどろくそぞろ寒

ペンチの秋  
 コスモスにはばまれペンチ遠ざかる  
 母鴉子鴉を呼ぶ柿日和  
 死角占む屍糞葛に藪虱  
 秋蝶や羽ばたきはもう控へしか  
 十六夜の風被て想ひ伝はらず

荻野千枝

寂光院  
 寂光院庭を粧ふ秋海棠  
 苔むしていよよ露けき燈たどる  
 黒焦げの胎内佛や秋しんしん  
 再生の彩色地藏屋の虫  
 秋の色一きは小原御幸趾

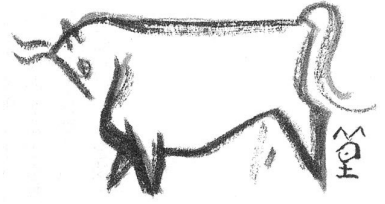
丹生をだまき

山田をがたま

百数へ痛みをそらす真夜寒し  
 抗癌治療拒みたる友師走の葬  
 ポストまでの目標いまだ冬日和  
 冬しぐれリハビリ通院ままならず  
 冬寒に己れのガンを告げ来し親友

立春  
 竹貫示虹

春立つに使ひ切れざる筆と紙  
 晩成に程遠くして日脚伸び  
 ももいろの薬効きさう春の風邪  
 半身は海鳴りとなる四温晴  
 只管といふは春待つ古机



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

秋そこに己が影にもつまづきて

あら草に月の雫の育つかな

ぶだうつぶつぶし切れない膝を抱く

逢へるかも身の丈に咲く草の花

大花野まんなかあたりの真空

野菊晴しばらく何も考へず

昼星を預りをりし花野かな

この先を如何に歩まむ星流る

一望の花野へ子の手放ちやり

草の絮早発ちしたる山頭火

東京 坂本 敏子

中島悠美子

大寺の風韻となる黒揚羽

さざ波のゆきつく先の枯蓮

喪の実熟れて和音の老夫婦

往還にただごとならぬかまど馬

どんぐりを踏んで蹴よみがへる

ほしづくよ娘のはなしふと思ひ出す

子の調子計る目盛りや秋の声

ダンボール秋刀魚分け合ふ米邦人

落鰻こびることなき料理長

冬近しやつと今年の意義見えて

城陽 大西優九里

アヲチ 伊吹 之博